



令和 8 年度
第36回島根県雲南市

永井隆 平和賞

| 入 | 賞 | 作 | 品 | 集 |

島根県雲南市教育委員会

目次

Contents

小学生低学年の部

- 最優秀賞 小さなしあわせ
優秀賞 空もよう
佳作 せんそうのことは話したくない
佳作 ぼくにできること

岡山県・倉敷市立緑丘小学校
愛媛県・愛媛大学教育学部附属小学校
島根県・雲南市立鍋山小学校
島根県・雲南市立三刀屋小学校
三宅 若狭 谷戸 景山
すみれ 早 日和 平保
大

小学生高学年の部

- 最優秀賞 心の葉^{しおり}
優秀賞 私達が繋ぐ
佳作 小さな「愛」から始まる「平和」の輪
佳作 私たちの力で平和へと

京都府・ノートルダム学院小学校
長崎県・長崎市立山里小学校
長崎県・長崎市立山里小学校
広島県・広島市立大州小学校
青山 長崎 川原 二反田
かん 恋は 新あ 佳
奈 花 大

中学生の部

- 最優秀賞 優しい言葉であふれる当たり前を
優秀賞 家族から受け取った記憶は私に生きる
佳作 今を平和と言えるか
佳作 託された平和のバトン
佳作 知ることを守る

島根県・島根大学教育学部附属
義務教育学校後期課程
福島県・郡山市立大槻中学校
東京都・板橋区立赤塚第二中学校
広島県・盈進中学校
東京都・板橋区立赤塚第二中学校
高倉 桑名 澤原 長谷川 樋爪
み 未 優 心 晴
羽 空 悠 陽 梨

高校生の部

最優秀賞 空白の向こうに

優秀賞 立ち止まる勇氣

佳作 平和を支えるもの

千葉県・鹿島朝日高等学校

神奈川県・横浜雙葉高等学校

沖縄県・未来高等学校
沖縄学習センター

勝木田

中島

黒島

大

知

穂

聖

花

華

一般の部

最優秀賞 最期の場所に灯る火

優秀賞 世界一小さな平和運動

佳作 その人の名を呼ぶところから

佳作 心の灯り

島根県

東京都

東京都

三重県

堀

中

本

原

西

村

多

祐

邦

清

若

多

夫

之

菜

作品集の作成にあたり、明らかな誤字・脱字以外は原文のまま編集を行っています。

最優秀賞

小さなしあわせ

岡山県倉敷市立緑丘小学校二年

三宅 堇

わたしのお家のにわには、南天の木があります。その木の
となりに、今年の春、むらさき色のかわいいスマレの花がさ
きました。このスマレは、きよ年の入学しきの帰り道、コン
クリートかべの水ぬきあなで見つけたものです。わたしは見
つけた時、

「こんなところから、すごい。」

とおどろきました。後からできたタネをもち帰り、にわで大
切にそだててすることにしました。

なぜかという、わたしの名前は堇だからです。わたしが
生まれた三月にさく、お母さんの大すきな花です。花こと
ばから、「せいじつ」で「けんきょ」な子になりますように、
「小さなしあわせ」を見つけられますようにというねがい
がこめられているそうです。

わたしは、お母さんから永井先生が書いた「南天の花」と
いう詩を教えてもらいました。

焼跡に われのみ生きて 南天の花に泣きぬ

永井先生は、せんそうで大切な人をなくしました。でも、生
きのこった南天を見て、生きようと前を向いたのだと思いま

す。とてもかなしくて、つらかったと思います。

ずかんでしらべると、南天の花ことばには「わたしのあい
はますばかり」や、しあわせを生むというみみの「ふくをな
す」、「よい家てい」などがあります。どれも自分のまわりの
人をだいいじにあいしています。すてきなことばです。スマレ
のやさしい心も、南天の花のあいする心も、どちらも永井先
生がみんなを上げますために、一生けんめいつたえたことば
のようでした。

毎日、あん心して学校へ行けること。大すきな人たちに、
たくさん名前をよんでもらえること。わたしは、この小さな
しあわせがつづくことが、へいわだと思っています。

これから、わたしは、おにわのスマレを、わたしのへい
わの花として大切にそだてます。あの時、見つけたスマレの
ように、わたしもつよく、まっすぐ生きます。

優 秀 賞

空もよう

愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校三年

若^{わか}狭^さ 早^{そう}

強い雨がふると、ぼくはドキッとしてしまいます。なぜなら、身のまわりで起きた土砂さいがいのおかげをおぼえているからです。れいわ六年七月、えひめ県の松山じょうの東がわで土砂さいがいがありました。その場所は、ぼくが毎週通っているダンス教室のすぐそばでした。毎日ごはんを食べて学校に行く「平和な生活」がうばわれてしまうことは、いつ起こるか分からないのだと知りました。

永井先生はせんそうによって平和な生活をうばわれました。命わずかだと知りながら、みらいのためにのこした「平和を」の言葉。ぼくは永井先生のことをもっと知りたくなり、「永井たかしはかせ生い立ちの家」を見学することになりました。三刀屋町には、永井先生が子どものころに住んでいたお家があります。地いきのかたがたが大切にのこしてきた生い立ちの家は、昔の時代にタイムスリップしたみたいなお家でした。ぼくが見学した時はたくさん雨がふった後だったので、となりの川は流れが速くなっていました。

ゆたかなしぜんの中で、のびのびすごした永井先生の写真は、何まいもありました。中でも、友だちと飯石川で遊んでいる写真がぼくの心にのこっています。この平和な生活があつ

たからこそ、平和のかけがえのなさが永井先生の言葉になったのだと思いました。毎日ごはんを食べて学校に行くことを、ぼくはときどき当たり前だと思っています。ですが、今ここにある平和は決して当たり前ではありません。せんそうの悲しみを語りつぐことは、みらいのためにもわすれてはいけないことなのです。

せんそうの他に平和な生活をうばうものは、さいがいだと思います。へいせい三十年七月の西日本ごう雨では、多くの場所でひがいが出たそうです。ぼくのおじいちゃんおばあちゃんが住む広島でも土砂さいがいが起きました。てい電、そしてだん水。何日も水道のじゃ口からお水が出なくて、きゆう水車からお水を運ぶのがたいへんだったことを聞きました。大雨のひがいは昔よりも大きくなり、早目に安全な場所へひなんすることが大切になっています。これまでのさいがいから学ぶことも、平和な生活を守るためにかかせないことだと思います。

れいわ八年五月から、ぼうさいきしょうじょうほうが新しいよび方でそろえられました。けいほう・注意ほうにレベルの数字がつき、ひなんするタイミングが分かりやすくなっています。こうやって、ぼうさいのいしきを高めることは平和な生活につながります。強い雨を止めることはできませんが、そなえることはできるのです。空もようをたしかめながら、これからも平和の中で生きていきたいです。

佳作

せんそうのことは話したくない

島根県雲南市立鍋山小学校三年

谷戸 日和保
たに と ひなほ

これは、もうなくなったひいおばあちゃんが言っていた言葉。わたしは、この言葉がとても心に残っている。

テレビでは、毎日のように外国で戦争をしているニュースがながれます。町には、ミサイルがおちて、家がこわれて、なっている人たちがたくさんいます。わたしは、こんなニュースを見るたびに、「なんのためにたたかっているのかな?」「だれがうれしいのかな?」と思います。

夜に、お母さんが永井隆先生の本を読んでもくれることがあります。その中に、「人が人をころすことはいけないことと知っているのに、国と国でたくさんころし合うせんそうがゆるされるのは、なぜだろう」という言葉がありました。わたしも本当にそう思いました。小さいころから、人はきずつてはいけないと教えてもらっているのに、なぜ、せんそうでは、たくさんの人が命をなくしてしまうのかな。なくし合ってしまうのかな。大切な命なのに。わたしと同じくらいの子どもたちがあぶない思いをしている様子もありました。

わたしのひいおばあちゃんは、せんそうのニュースを見ることはあまりなかったようです。「せんそうはすかん。いい

ことはなんもない。」そう言っていました。きっと思い出したくないくらいいいことがあったのだと思います。「せんそうのことは話したくない」と言った、ひいおばあちゃん言葉から、せんそうのかなしさやつらさが伝わってきます。わたしは、ひいおばあちゃんのこの言葉が、せんそうのない世界になることの大切さを考えるきっかけになりました。

わたしは、今、とてもしあわせです。四人の兄弟は、なかがよく、笑ってご飯を食べたりお話をしたりします。どんなにいやなことがあった日でも、家族がいると、「また、明日もがんばろう。」と、思います。わたしは、この幸せが毎日続いてほしいです。そして、家族と笑ってすごせる毎日が世界中の人にあつてほしいです。もし、一人一人が、大切な人の笑顔を守りたいと思ったら、世界中のせんそうはなくなるのかな。なくなつてほしいな。

佳作

ぼくにできること

島根県雲南市立三万屋小学校二年

景^{かげ}山^{やま}平^{へい}大^た

ぼくには、いもうとがいます。いつもいっしょにあそんでいます。いもうとはおままごとがすきなので、よくいっしょにやっています。いもうとはとてもかわいくて、ぼくはだいですきです。ときどき、あそんでいるときに、おたがいにわる口を言ってしまったり、思ったとおりにあそんでくれなかったりしてけんかになります。でも、すぐになかなおりできます。ぼくのだいじないもうとです。

ぼくはこの前、ながいたかしはかせのベンキょうをしました。ながいたかしはかせは自分が、びょうきやけがのときにも、ほかの人をたすけていました。それに、へいわのために本も作っていました。

ぼくには、ながいたかしはかせみたいのに、びょうきの人に人をたすけたり、本をつくったりすることはできません。でも、じぶんのかぞくがびょうきのときにたすけてあげることがができます。

前に、いもうとがかぜでねつが出たことができました。ぼくは、

「いっしょにあそべないのは、いやだな。はやくよくなってほしいな。ぼくにできることはないかな。」

と思いました。その時、ぼくがねつが出たときスポーツドリンクをのんで、げんきになったことを思い出しました。だからいもうとにも、スポーツドリンクをあげることにしました。

いもうとにスポーツドリンクをのませてあげると、すぐよくこんでくれました。スポーツドリンクのおかげかはわからないけれど、いもうとがげん気になった気がしました。

ぼくには、ながいたかしはかせみたいのに、いろんな人をたすけることはできません。でも、ぼくのたいせつなかぞくをやさしくすることならできます。これから、ぼくにできることをやっていきたいです。

最優秀賞

心の葉しおり

京都府ノートルダム学院小学校五年

青山葉奈あおやま かな

学校の平和学習で長崎県へ行く。どのような歴史のある所なのか気になり、調べる中で永井博士のことを知った。

永井博士は、医師として働く中でたくさん放射線を浴びて白血病になった。さらに、長崎県への原爆投下時に、妻を亡くして被曝をして大けがもしたが、休むことなく他の被爆者の救護にあたった。また、二人の子どもたちを父として愛し、平和を願い本を書き続けて言葉でも人々を勇気づけた。最期まで人々のために尽くした人生に驚いた。

私には、身近に白血病で闘病中の友だちがいる。治療の様子を見聞きする度に、薬の副作用や体調のしんどさなど大変そうだと感じる。また、私の父は医師だ。医師の仕事は、家族でなかなか一緒に夕食を食べることができない程、昼夜問わず患者さんの状態に合わせて働く体力が必要だ。また、私も難病だ。私は、ほとんど汗をかけず熱中症になりやすく、暑い季節は体がとにかくだるくて辛い。なので、家族や周囲の人に日常生活の手助けをしてもらいながら何とか生活している。

それぞれの大変さを知るからこそ、一人で全てを背負うことは私にはできない。さらに、衣食住などの当たり前を奪われる戦争の最中、辛さを一人で背負い、他者を思いやり

ながら行動をしていた永井博士は、本当に強い人だと感じた。「強さ」とは、外的な力のことではなく心のことだ。なぜ、永井博士はここまで心が強いいられたのだろうか？

それはきっと、永井博士が常に愛をもっていたからだ。愛という字の中心には、「心」という字がある。もし、永井博士のような生活をしていたら、「なぜ自分だけこのような大変な思いをしなくてはならないのだろうか？」と、他者のために使う時間は最小限にして、少しでも自分の心身が楽になるような生活をしようと思う。けれど、永井博士は亡くなるまで故郷や家族、人々に対して真心をもち続け生活をしていたのだろう。これは誰にでも真似ができることではない。

平和学習で長崎県へ行く時に、戦争の時代の様子を実際に見学して、現地でしか学べないことを学びたい。私の学校も永井博士のように、キリスト教の教えを学び、朝の会から帰りの会まで祈りが身近にある。なので、平和が続くことへの感謝と戦争で犠牲になった人々が安らかに眠れるように祈りたい。

私は病気と向き合うことが日常で、周りの友だちより制限の多い生活を送っている。そのような生活で、心が疲れることが多い。だからこそ、後ろ向きにならず、永井博士の言葉「どん底に大地あり」や「如己愛人」のように、悲しむより自分にできることを精一杯やりながら、どんな時も希望と真心を忘れず周囲の人々に接していききたいと思う。

私は、永井博士の言葉を心の葉にして、一日一日を大切に生活していきたいと思う。

優 秀 賞

私達が繋ぐ

長崎県長崎市立山里小学校六年

長崎恋花
なが さき は な

私は今、長崎市立山里小学校に通っている。長崎市は、原子爆弾が落とされてから今年で八十一年が経つ。今は、本当に原子爆弾が落ちたのかと思うくらいに街は発展している。けれど、街の細かなところに目を向けると、爆弾の爪痕が今もなお残っているのだ。人々は被爆した後も病気で苦しめられたり、建物や物にさえ焼かれた跡が残ったりしている。私達が通っている山里小学校にも、防空壕が残っている。

そんな山里小学校には、語り部として被爆された方が来ることがある。お話を聞くたびに胸が締め付けられる思いになり、本当にあったことだろうかと思いを疑う。被爆した当時は、私達と同じくらいの年代なのだから、そのことを思うと本当にいたたまれない。

私は、ある被爆者の方の言葉に強い衝撃を受けたことがある。それは、目に涙をためながら言われた「次は、皆さんが平和の素晴らしさ、戦争の悲惨さを伝えてくださいね」という言葉だ。私はすごい衝撃を受けた。これまで、自分たちが伝えようと思ったことがなかったからだ。当時小学五年生だった私には、それが本当に衝撃だった。

それから、私達に伝えられることはないかとたくさん調べ

た。そして、「ピースソングプロジェクト」という、純心大学の方々と歌を作って歌うイベントを見つけた。今までは積極的に参加しなかったけれど、被爆者の方の話を思い出し、思いついて参加することにした。山里小学校と純心大学が一緒になってオリジナルの曲を作り、ホールで歌った。その時の私は、こういう活動に参加すること自体に大きな意味があるのではないかと思っていた。

それから六年生になった今、今度は八月九日にある長崎市平和祈念式典に、児童合唱として参加することになった。式に参加したからといって、すぐに世界が平和になるとは限らない。しかし、一年前と同じように、参加をして世界中に向けて「あの子」の歌声を届けることには、とても強い意味があると信じている。

私は原爆の恐ろしさを実際に感じていないから、本当の恐ろしさは分からないかもしれない。しかし、平和の大切さはこの六年間でたくさん学んできた。だからこそ、私だからこそ伝えられる思いもあると思う。

私が山里小学校で積み上げてきた六年間を無駄にはせず、被爆者の方が言っていたように、次は私達が代わって、平和の大切さや原爆の恐ろしさを伝えていきたい。そして、世界が戦争をして二度と傷つく人や悲しむ人が出ないように、これから何年先もずっと平和であるように、長崎の地から願い、歌い続けたい。

佳作

小さな「愛」から始まる「平和」の輪

長崎県長崎市立山里小学校六年

川^{かわ}原^{はら}新^{あら}大^た

「世界平和」という言葉を耳にするとき、私達はどこか遠い国の出来事や、歴史の本の話のように感じてしまうだろう。ニュースに映し出される危険な情勢や、激しい争いの映像を目にするとき、私達は自分の無力さを痛感し、「自分には何もできない」と視線を背けてしまいがちになる。

しかし、本当にそうだろうか。平和とは、限られた指導者たちだけが権利をもつてつくり出すものではなく、私達の日常の延長線上にあるもののはずだ。そして、その平和の根底にあるものが「愛」なのだと思ふ。私が考える「愛」とは、決して特別なものではなく、身近な人の心に寄り添い、思いやる心のことだ。私には、忘れられない経験がある。

五年生の時、友達との些細な誤解から、お互いに自分の主張ばかりを譲らず、関係が険悪になってしまったことがある。そのとき、別の友達がそつと間に入り、「二人とも、まずは落ち着いて相手の話を聞こう」と声をかけてくれた。その友達の穏やかな態度と、私達を気遣う優しさに触れた瞬間、かたくなだった私の心がすつと軽くなるのを感じた。相手の立

場になって考える心のゆとりが生まれたことで、私達は自然と仲直りをする事ができたのだ。

この出来事は、私に大きな気付きを与えてくれた。もしあのとき、誰も相手を思いやる「愛」を持たず、自分の正しさだけを押し付け合っていたら、争いはもっと過激になっていただろう。国と国との大きな紛争も、始まりはこうした小さな心のすれ違いや、自己中心的な考え方の積み重ねなのかもしれない。歴史的な偉人は、「世界平和のために何ができるか」と問われた際、「家に帰って、あなたの家族を愛しなさい」と答えたという。この言葉は、平和の本質を突いている。目の前にいる家族や友達を大切にできない人が、世界の人々を愛せるはずがない。

笑顔で挨拶をすること、困っている人に手を差し伸べること、相手の意見を否定せずに聞くこと。それらの一つ一つが、私たちの日常に潜む小さな「愛」の形だ。一人ひとりの愛の力は小さなものかもしれない。しかし、小さな愛が広がり、重なり合うことで、やがて社会全体を包む大きな「平和」という海になるのだと信じている。世界をいきなり変えることは難しくても、自分の隣にいる人を笑顔にすることは今すぐにでもできる。私はこれからも、身近な人への思いやりという「愛」の種をまき続け、自分たちの手で確かな「平和」を育てていきたい。

佳作

私たちの力で平和へと

広島県広島市立大洲小学校六年

二反田 知佳
に た ん だ ち か

今、このしゅん間もどこかで戦争が起きています。戦争は、人々の日常から笑顔をうばい、心に深い傷を負わせるだけの何も生まない悲劇です。

私はこれまで、平和とは遠い国の出来事のように感じていました。しかし、五年生での平和学習を通して、その考えは大きく変わりました。平和は誰かがつくってくれるものではなく、私たちの「心」の中から始まるものだ気付いたからです。

私は、広島の前爆被害について学びました。そこで最も胸がしめつけられたのは、生き残った人々を待ち受けていた「差別」という現実です。原子爆弾から必死の思いで生き抜いた人々に対し、あるうことか「被爆者だから気持ち悪い」「病気がうつる」といった心ない言葉が投げかけられ、差別があったことを知りました。自分は何も悪いことをしていないのに、ただそこにいたというだけで差別をされる。その絶望感は、身体の前以上にとれほど深く心をえぐったことでしょうか。頑張つて生き抜いた人々をさらに苦しめる。そんなことは、絶対にあつてはならないことだと私は考えます。

では、なぜこのような悲しい出来事や争いが起きてしまうのでしょうか。自分の経験を振り返つて考えてみました。

友達や家族とけんかをした経験があります。思い返してみると、そこには「自分勝手」な心がありました。自分の意見が絶対に正しいと思ひ込み、相手の立場に立とうとしない。互いの意見がすれ違い、一歩も引かずに自分を押し通そうとする時、争いが生まれます。「相手を尊重せず、自分が正しいと主張する独りよがりな心」があるのです。自分の正義だけを信じ、相手を否定した結果、取り返しのかない大きな争いへと発展してしまうのです。

私たちにできることは日常の中にある「思いやり」だと考えます。相手の心に寄り添うこと。相手の意見を尊重し合うこと。この当たり前の「思いやり」こそが、差別をなくし、争いを防ぐための最強の盾になるのです。

誰に対しても差別をせず、思いやりの心をもって生活をする。それは特別なことではありません。あいさつを交わす。相手の話を最後まで聞く。困っている人に声をかける。そんな小さな積み重ねが、平和への第一歩になるはずです。

世界中の人々が、身近な誰かを思いやり、差別をしない心を共有できたなら、いつか必ず戦争がない世界が実現すると信じています。平和への道のりは遠く険しいかもしれませんが、まずは私たちが、平和の輪を広げていきましょう。

最優秀賞

優しい言葉であふれる当たり前を

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程九年

高^{たか}倉^{くら}未^み羽^わ

「平和とは何ですか？」

以前の私なら、「戦争がないことです」と答えていただろう。しかし、沖縄で過ごした三日間は、その答えを大きく変えた。

私の考えを変えたきっかけは、沖縄戦体験者であるTさんの講話だった。Tさんのお話を聞き、私は初めて戦争の中にいる気分になった。実際に見た光景をありありと、自分の感情をそのままに語るTさんの姿を見て、心が張り裂けそうになった。私は、「かわいそう」とは少しも思わなかった。その言葉では表せないほどの苦しみがあったからだ。ただ生きたい。その願いを胸に、人々は必死にもがき、必死に生きぬこうとしていた。その講話の中で忘れられない話がある。沖縄戦では多くの住民がガマへ避難した。あるガマでは「アメリカ兵に捕まれば殺される。殺されるくらいなら自分で死んだほうがいい。」という言葉を信じ、多くの人が集団自決という悲しい結末をむかえた。しかし、別のガマでは、「アメリカ兵は住民を殺さない。だから生きよう。」と必死に説得した人がいた。その言葉を信じた人たちは外へ出て、多くの命が救われたという。私は言葉を失った。同じ沖縄戦。同じ恐怖。同じように明日が見えない状況。それなのに結果は全く違った。命を分けたものは、武器でも食料でもなかった。言葉だった。その時、私は初めて「言葉」の本当の重さを知った。言葉には人をはげます力がある。安心させ、希望を与える力ももっている。そして反対に、人を追いつめ、恐怖を広げ、ときには命さ

え左右してしまう力もある。私は今まで、言葉は気持ちを伝えるものだと思っていた。でも、言葉は人の未来をつくるものなのだと気づいた。だから、私は思う。平和とは、戦争がないことだけではない。誰かを傷つける言葉ではなく支える言葉を選ぶこと。おたがいを思いやり、「大丈夫」と言い合えること。安心して「また明日」と言えること。そんな何気ない日常こそ、本当の平和なのではないだろうか。

また、その後の民泊で私は更に学びを得た。民泊の方は初めて会う私たちに優しく笑顔でむかえてくださった。なにげないことで笑い合い、一緒に食卓を囲んだ。そして別れ際、「また帰っておいで。」と声をかけてもらった。その時、私は講話で聞いた「生きよう」という言葉を思い出した。八十一年前、「生きよう」という言葉は命をつないだ。そして、今も、「また帰っておいで」という言葉は、私たちの心と愛をつないでいる。いつの時代も「言葉」は人をつなぐかけ橋になっていた。

私は今回の沖縄での経験を通して、平和とは戦争がないことだけではなくと改めて知った。誰かを思いやること。安心できる言葉をかけ合えること。笑顔で「また明日」と言えること。そして、「また帰っておいで」とむかえてくれる人がいること。そんな当たり前の日常こそ、多くの人が多くの人が願い、守ろうとした平和なのだと思う。

「平和とはなんですか。」

今、私がこの質問をされたら、

「優しい言葉であふれる当たり前です。」

と答える。沖縄で出会った人たちの思いと言葉を受けついदैいきたい。そしてそれをいつか高校生平和大使として世界に発信していきたい。

優秀賞

家族から受け取った記憶は私に生きる

福島県郡山市立大槻中学校二年

桑くわ名な優そ空ら

私は、戦争を体験したことがない。ニュースで流れる戦争や紛争も、遠い国の出来事で現実味がなかった。私は平和な日本でよかったと思っていた。けれど、小学生の頃に母から聞いた曾祖母の戦争体験の話が、その考えを大きく変えた。

私の曾祖母は、テナン島で暮らしていた。福島県の雪深い地方から、家族で南の島へと移住をし、サトウキビ畑を開拓してとても豊かに暮らしていたそうだ。テナン島のことを、

「天国のような場所だった。」

と、繰り返すように話していたそうだ。しかし、戦争は、そんな日常を壊して、米兵が島へ上陸するとなれば、残酷な目に遭うから、その時は覚悟を決めて自害しろと教えられ、恐怖の中でジャングルに逃げた。逃げる途中砲弾で大怪我を負った家族を置いて逃げなければならなかった時、後ろ髪を引かれる思いで悔いて泣いていたと知った。

逃げた先で米兵の捕虜になり、捕まったことで死を覚悟して震えている時、何日も食わずにいたのを知ってか一人の青い目をした兵士が笑顔で手招きをし、お菓子を差し出してくれた。

「殺されると思っていた。」

敵だと思っている相手から慈悲深く手を伸ばして優しくされ、憎しみや恐怖から相手を見ていた自分を恥ずかしく感じた、そう話していたそうだ。

その後すぐ、自分たちが開拓をしたテナン島から、広島と長崎へ原子爆弾を運んで飛行機が飛び立っていった。自分たちが天国のように愛した島が、悪魔の島になってしまった感覚に苦しんだのだ。

私は、この曾祖母の記憶を知った時、敵や味方という言葉だけで戦争は語れないと思った。恐ろしいと教えられていた青い目をした兵士は命をやり、一方で、多くの命を一瞬にして無残に奪う原子爆弾を落とした。私たち日本兵も、たくさんの命を奪っていたことを忘れてはならない。戦争は人の命だけでなく、思考回路も大きく変え心を奪ってしまうと、痛いほどに実感をした。

永井隆博士の「如己愛人」の言葉は、聖書の教えからきていると調べて知った。軍医として戦場へ従軍した時、敵味方なく治療にあたった魂は、私の夢である医療従事者になりたい胸の中にしっかり宿るのを感じる言葉だ。人の思いは、時が経っても消えるものではない。悲しみも苦しみも、それに反する豊かな楽しみや喜びも。生きていると思うのだ。私の家族のこの記憶も、今の私の中で生きている。

今年の夏、市の平和を考える長崎派遣事業で初めて被爆地の長崎を訪れる予定だ。今の平和が、大きな犠牲の上で築かれていること。奇しくも、私は八月九日に生まれて、長崎の平和の日のことを、毎年他人事とは考えられなかった。この日の出来事をしっかりと知らなければならぬと強く感じていた。

私たちは戦争を知らない世代。けれど、一緒に長崎へ出向く仲間にもそれぞれ家族の記憶がある筈で、迎え入れていただく方にも、その他の土地や国内外でも、家族から受け取った記憶を未来へ確かに手渡していかなければならない。自分の目で真摯に向き合い、平和や愛がどれだけ尊いものであるかを受け取ってきたいと願っている。この先も平和が続いていくことを祈り、平和を渴望された命たちを考え続け、その先の家族へ繋いで生かしていきたい。

佳作

今を平和と言えるか

東京都板橋区立赤塚第二中学校三年

澤原悠さわはら ゆう

私は東京都に住む学生の一人だ。近所で簡単に買い物ができるし、バスが多く、乗りたい時間に乗れる。出かけずとも娯楽がたくさんあって、スマートフォン一つで好きなように遊ぶことができる。そんな生活インフラが整っていたり、やりたいことが容易にやれたりする環境において、「戦争や震災」は架空のものと言えるだろう。それらが見られるのはいつだって映像の中。学校での授業やニュースを通してしか触れず、どこか他人事で、自分には関係ないと捉えてしまいがちだ。また、海外の戦争のニュースを見たときに「この国と違って日本は平和だね。」と言われたり話したりすることがある。確かに日本は戦争をしていない。しかし、今一度考えてほしい。今の日本は平和だろうか。私はそうは思わない。それどころか危険な状況だとさえ思う。

東日本大震災から十五年。そんな長い月日が流れた後を私は生きている。その当時の人たちが受けた恐怖を知らないし、ライフラインが使えなかったり、津波が町を飲み込んだりしたことを体験していない。震災を経験していない私や当時まだ幼かった人にとっては、テレビで見る戦争と同じ扱いになると思う。昔日本であったことという認識で終わってしまい、「今とは関係ない」と切り離してしまっているのだ。この関心の無さが危険に思える。言い方を変えれば「戦争なんて今の日本で起こるはずがない」「地震なんて慣れているし、気にしなくていい」と考えているのだ。本当にそうだろうか。首都

直下地震や南海トラフ巨大地震。これらの大規模な災害はいつ起こってもおかしくないと言われている。だが、ここ数年は何も無い。私たちが操作することのできないものであるために、注意が必要なのにも関わらず、それらへの関心は薄れている。私の学校の避難訓練では、「どうせ起こらないから」とでも言うように不真面目な態度の人が多く見られた。このことから、安全な今を当然と誤解し始めている人が増えているのだと考える。

この無関心さは、災害に対してだけではない。日本の歴史に対して同じように起こっている。たとえば、戦争について話すときに話題になる原爆の話。これについて、広島や長崎に住んでいるわけではない私たちの中にはいつの出来事かすら知らない人もいる。こうした大きな出来事でさえあまり知らないし、忘れてきてしまっているのだ。当時の恐怖の語り手は毎年減っているため、私たちが積極的に耳を傾けなければ、それらの事実は風化していつてしまう。かつて起きた争いや地震を乗り越えてつくられた今の生活に対して、私たちは関心を失いすぎていると言えるだろう。今の当たり前に快適な生活は決してたまたま出来たものではなく、被害を受けた先人たちが繋いでくれたものである。そのことを忘れて生きるのは彼らに失礼だ。

平和とは戦争や災害が起こっておらず安心して暮らせることだけではない。今の自分がどれほど幸せな空間にいるのかをはっきり理解して、毎日を大切に生きる。そして、今快適な生活が送れるのは、過去に多くのものを失ったが、その都度立ち上がってきた人々の強さがあったからこそだということを次の世代に繋いでいく。私たち全員がこれをできて初めて、平和と言えるはずだ。画面の向こうの出来事を自分事として考えて、やれることを探す。これが、今を生きる私たちに必要なことだと思う。

佳作

託された平和のバトン

広島県盈進中学校三年

はせがわ
長谷川 心 陽

清水弘士さんの訃報から一年が経った。今も彼の存在は私の中に残り続けている。

私が尊敬する被爆者の清水弘士さん。昨年七月、八十三歳で亡くなられた。いつも力強く語りかけてくださった弘士さんの姿は今も鮮明に覚えている。

弘士さんは三歳で被爆し、亡くなるまで原爆症と向き合い続けた。「被爆者の空白の十年間。」その言葉には、誰にも救われなかった歲月の苦しみが込められていた。弘士さんは語った。「この期間は戦争中の苦しみ以上に厳しい生活でした。そのうえ何十年経ってからでも原爆の後遺障害に苦しまなければならない。私たち被爆者にとつて戦争は死ぬまで終わらないです。」誰にも言えなかった苦しみや取り残された悲しみは決して消えることはない。弘士さんは亡くなる二日前まで証言を続けた。原爆の悲惨さをたくさんの人に知ってもらいたいという気概がそこにはあった。そのひたむきな姿に心を打たれ、「伝え続けること」の使命を感じた。

私は平和と人権に関するクラブ活動に所属している。弘士さんとはその活動の中で出会った。今から二年前被爆証言を聞き、現在の活動について話を聞いたのが最初だ。その時、そのような活動をしておられる弘士さんに勇気づけられ、このクラブでの活動に意欲がわいた。

そのクラブ活動の中で「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」という核廃絶を求める署名を集める活動を行っている。

原爆ドーム前で署名活動をした時のことだ。

夏の日差しが照りつける中、私は一日中署名を集めて回った。声をかけては断られての繰り返しでだんだん自信をなくしてしまった。しかし、ふと弘士さんの姿が頭によぎった。「戦争は死ぬまで終わらない。」その言葉を思い出し、「私が弱音を吐いてはいけない」と思った。弘士さんの活動に対する姿勢や言葉が私を奮い立たせた。

署名に協力してくださった女性が、同様の署名活動をしていると分かった。私たちの活動が意義あることだと認めてもらえたような気がした。最後には「一緒に活動を頑張ろう。」と励ましの声をかけてくださった。その瞬間、弘士さんが守り続けてきた思いは、確かに私へ受け継がれていると感じた。たまらなくうれしかった。平和の輪がまた少し広がり、継承のバトンが繋がれた。

私も彼らのように力強く署名活動を続けていく。そして、被爆者の方々の思いを胸に弘士さんたちが思い求めてきた核のない平和な世界に向けてこれからも行動を起こしていく。

「八十年前の原爆の話は、昔話ではない。いまにつながる問題だ。」弘士さんの力強いメッセージだ。私はこの言葉を世界中の人々に伝えたい。あの日から八十一年がたった今も戦争や紛争は絶えず毎日空襲警報に怯えながら死と隣り合わせの生活を送る人々がいる。核廃絶は被爆者の苦しみが原点。もう二度と同じ過ちを繰り返さないために、今こそ被爆者の声に耳を傾けるべきだ。彼の思いを後世に伝えることができるのは私たちだけだ。だからこそ、彼の分まで。いや、それ以上に核廃絶の思いを訴える。

今も弘士さんの声が聞こえる。「八十年前の原爆の話は、昔話ではない。いまにつながる問題だ」署名活動のたび、その言葉を思い出す。弘士さん、見守っていてください。これから私が弘士さんの思いを受け継ぎます。原爆ドーム前でこう誓った。

佳作

知ることを守る

東京都板橋区立赤塚第二中学校三年

樋爪晴梨

「平和は人類共通の世界遺産である」

皆さんはこの言葉を知っているだろうか。この言葉は、二〇二四年の長崎平和祈念式典で被爆者代表として三瀬清一朗さんが読んだ「平和への誓い」の中の一文である。私はこの言葉を戦後八十年である昨年知った。

私は昨年八月に学校代表として平和学習で被爆地である長崎へ足を踏み入れた。そこでは、二泊三日という短い期間だったが平和祈念式典や原爆資料館など、戦争や平和に関する貴重な体験をした。その中で特に印象に残っているのが被爆者体験講話だ。長崎で十歳のときに被爆した三瀬清一朗さんのお話を聞いた。三瀬さんは家族全員無事だったそうだが、自分の小学校が死体処理場と化し、今でも忘れられない光景となっておりおっしゃっていた。そんな講話で最も心を打たれたのが、「平和は人類共通の世界遺産である。」という言葉。これは戦争の悲惨な記憶や平和への願いを、年齢・国籍問わず語り継いでいくべき「価値ある財産」という意味が込められている。私はこの言葉を初めて耳にしたときは、正直どういうことなのかよくわからなかった。平和とは抽象的に表現されている、単純な単語だと私は考えていたから。しかし三瀬さんの話を聞くうちに、確かに平和とは抽象的で形にはないものだけど、世界中のどの建築物よりも一番大切なものだと感じた。

また私はこの出来事から、世界遺産に興味をもち、世界遺産検定を取得した。世界遺産検定を通して、私は世界遺産条約が誕生した経緯も知った。第二次世界大戦で灰となった街や人々だけでなく、人類が何千年もの月日をかけて築いてきた文化や遺跡も一瞬で壊された。その深い反省から生まれたのが「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」というユネスコ憲章の精神だ。国や言語、宗教の違いを越えて互いの宝物を「地球共通の財産」として守り合うという世界遺産の仕組みが、人類による「平和への決意表明」そのものだということだったのだ。

長崎で原爆の恐ろしさを学び、世界遺産検定で戦争の悲惨さを知った。そのため戦争は多くの尊い命を奪う、言葉では表せないほど醜いものだと私は考える。それにも関わらず世界では武力による攻撃をしている国があったり、今すぐに使える核兵器が約一万二千発あったりと、私たちの生活が日々脅かされている。けれど、今の中学生の自分に争いを止める大きな力はない。しかし、「突然日常を奪い、人々の命を脅かすものは戦争だけではなく自然災害も同じではないか」ということに気がついた。戦争をなくすことは難しくても、明日来るかもしれない災害から、大好きな家族や友達の命を守ることなら、今の自分にもできるはずだ。平和や戦争のことを学んだ私は、今ある命を守ることの重要性を身にしみて感じた。そこで、中学生で「防災士」の資格を取得すると決心した。取得することができた今は、「如己愛人」の考えをもとに、まずは身近な家族や友達を守るよう学びを止めずに日々精進することを誓う。そして、今「平和は人類共通の世界遺産である」という言葉や防災士の資格を取れる環境で生活できていることに感謝しながら、一生懸命生きていきたい。

最優秀賞

空白の向こうに

千葉県鹿島朝日高等学校三年

勝木田 大聖 かつきた たい せい

手のひらの上のスマートフォンを開けば、世界中の出来事が流れ込んでくる。遠い国で起きている戦争の映像も、誰かを傷つける言葉も、同じ画面の中を絶え間なく通り過ぎていく。私たちはかつてないほど世界とつながっているはずなのに、なぜこれほど他者を遠く感じてしまうのだろうか。物理的な戦火のない日本でさえ、私たちの心の中には小さな戦争が存在しているのではないか。相手を理解しようとせず、自分と違う存在を遠ざけること。他者を一人の間ではなく、都合のよい記号としてみてしまうこと。そんな現代社会への違和感が、私の心の中に澱のように沈んでいた。

その問いに向き合うきっかけとなった出来事がある。高校一年の冬から参加した、外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援ボランティアでのことだ。そこで出会ったルカスは、日本語が得意ではなかった。私は最初、「助けてあげなければ」と思った。問題の解き方を説明し、励まし、何とか心を開いてもらおうとした。しかし彼はほとんど話さなかった。私が声をかけても目を伏せたまま、小さくうなずくだけだった。私は焦った。今思えば、その時の私はルカス自身を見ていなかった。「支援される子ども」「助けるべき相手」という記号として見ていただけだったのである。

ある日、彼は算数の問題集を前にして突然泣き出した。ぽつり、ぽつりと涙がノートに落ちた。私は励まそうとして言葉を探したが、何も出てこなかった。その時、初めて立ち止まって考えた。もし言葉の通じない国で暮らし、友達の会話についていけなかったら、どれほど不安で悔しいだろうか。私は言葉をかけることをやめ、ただ

静かに隣に座った。しばらくしてルカスは顔を上げ、小さな声で「ムズカシイ」と言った。その一言には、悔しさと孤独が詰まっていた。私は頷きながら「一緒にやろう」と言った。その瞬間、私たちの間にあった見えない壁が少しだけ崩れた気がした。言葉の壁を越えて、彼の痛みが私の胸に静かに流れ込んできた。私はルカスの涙を見た時、初めて他者の痛みを自分のこととして受け止めようとしたのだと思う。

その後、永井隆博士の「己の如く人を愛せよ」という言葉に出会ったとき、私はあの日のルカスとの時間を強烈に思い出した。最愛の妻を失い、自らも病を抱えながら人々のために生きた永井博士。その生涯に触れ、私はこの言葉の意味を実感した。愛とは同情ではない。相手をかわいそうだと思うことでもない。相手の立場に立ち、その痛みを自分のこととして受け止めようとするのだ。自らも傷つきながら他者の傷を癒そうとした永井博士の生き方を、ルカスの隣で沈黙を分かち合ったあの日の経験は、規模こそ違えど同じ方向を向いていたように思う。

永井博士は、「戦争を防ぐと叫ぶだけではなく、その原因を見なければならぬ」と語った。私は、その原因の一つが他者への想像力の欠如だと思う。相手を理解しようとしないうちに、違いを恐れ、無関心でいること。そうした小さな分断が積み重なり、人と人との対立を生み、やがて大きな争いへとつながっていくのではないだろうか。平和とは、たんに戦争がない状態ではない。目の前の人の声に耳を傾け、違いを認め、他者の痛みに寄り添うことだ。そうした小さな営みの積み重ねそのものが、平和なのだと思う。

終戦から長い年月が過ぎた今も、世界では戦争が続いている。しかし私は、平和への第一歩は違う国ではなく、自分の日常の中にあると信じている。胸の奥で、あの日ルカスと共有した、あの言葉に「空白」が今も静かに響いている。それは、人を遠ざける壁ではなく、互いを理解するための入り口だった。それこそが「長崎の鐘」なのである。

優秀賞

立ち止まる勇氣

神奈川県横浜雙葉高等学校二年

中島知花

今年の秋、私は初めて長崎を訪れる。その校外学習の事前学習で改めて戦争について学び直している中で、特に印象的だったのはマンハッタン計画だ。指導者や科学者、その誰もが自分なりの正義を持っていたが、その正しさが彼らに立ち止まることを許さず、勝利や成功に固執させた。マンハッタン計画の中心であるオッペンハイマーは、祖国を守るため、科学を発展させるため、ナチスを止めるためといった、大義を信じて開発に従事した。しかし、成功のレールに乗ると、当初の目標を見失ってしまい、その結果、二十一人もの命が奪われ、オッペンハイマーは生涯葛藤することとなった。「正しさ」は時に人を暴走させる。自分の正しさを疑えなくなった瞬間、人は止まれなくなってしまう。

一方で、被爆側である長崎・広島に目を向けてみよう。永井隆は「誰が悪いか」ではなく目の前で苦しむ人をどう支えるかを考えた。永井隆の唱えた浦上燐祭説は現代の国際法違反の追及という正論から見れば、米軍の加害責任を曖昧にするものと批判されることもある。正直、私は浦上燐祭説そのものには賛成できない。それでも、愛する人を失い、世間からは天罰と蔑まれる絶望の底にいた人々に言葉を与えようとした姿勢には心を動かされざるをえない。遠藤周作の「正しい信仰」ではなく「弱い人間へのまなざし」を書いた名作『沈黙』で、踏み絵を踏まざるを得なかった弱者に主人公が寄り添う姿と重なる。転びキリシタンは教義的には正しくないのだろうし、浦上燐祭説も正論ではない。しかし、苦しみの中にある時こそ、

正しさではなく寄り添うことが最も大切なのではないだろうか。

私たちの生きるこの日本は、唯一の戦争被爆国である一方、第二次世界大戦や太平洋戦争で他国に大きな被害を与えた加害国でもある。また、核兵器廃絶を願いながら、安全保障では核抑止にも依存している。このように大きな矛盾を抱えているが、それをどちらか一方だけの「正しさ」で切り捨ててしまえば、対話は止まってしまいうだろう。平和とは、自分の正しさだけを主張することではなく、異なる立場やその痛みにも耳を傾け続けることではないだろうか。日本が果たすべき責任とは、どちらかの「正しさ」を大声で主張することではない。自らの中にある矛盾を認め、異なる正しさの間で対話の架け橋となることだ。

戦争を直接経験した世代の記憶が失われゆく中で、私たちは戦前・戦中・戦後と、時代ごとの「正しさ」や熱狂に簡単に流されてきた大衆の脆さを忘れてはならない。かつて私は「平和とは戦争をなくすこと」だと思っていた。しかし、永井隆やオッペンハイマー、遠藤周作に触れた今、私の考えは少し変わった。平和とは強い正義を掲げることではなく、自分が正しいと信じたときほど立ち止まり、苦しむ人の声に耳を傾けること、「本当にこれでいいのか」と一歩立ち止まる勇氣を持つことなのではないか。

オッペンハイマーは最後まで葛藤し続けた。永井隆も苦しみながら言葉を探し続けた。『沈黙』のロドリゴも迷い続けた。彼らは「答えを持つていた人」ではなく、「答えのない問いを抱え続けた人」だ。迷い続けることは弱さではなく、人間に必要な強さなのだ。

私はこの秋、長崎を訪れる。そこで被爆の悲惨さだけでなく、人が苦しみの中で何を支えに生きたのかにも目を向けたい。そして、自分が「正しい」と思ったときほど立ち止まり、目の前の人の痛みを耳を傾けられる人でありたい。それが私の考える「愛」と「平和」の第一歩である。

佳作

平和を支えるもの

沖縄県未来高等学校沖縄学習センター三年

黒島穂華

「これは、銃も爆弾も使わなかったけれど、れっきとした戦争です。」中学二年の夏、「戦争」について学ぶ授業の中で聞いたその言葉は、ずっと私の心に残っています。

沖縄県八重山諸島、緑豊かな山々、四季折々の祭りや伝統文化、たくさん生きものの達の命溢れるこの島は私の大好きなふるさとです。けれど、このふるさとの歴史を知らなければ知るほど、胸が痛くなる出来事があります。それは「戦争マラリア」です。マラリアは、蚊が媒介する感染症です。高い熱や寒気、頭痛、嘔吐などの症状が出て、当時は薬もなく、感染した人の命を奪うことも少なくありませんでした。

終戦間近の一九四五年、日本軍はアメリカ軍の上陸に備えて、石垣島や竹富島の住民を西表島などのジャングル地帯へと疎開させました。当時、そこはマラリアが蔓延していた場所でした。「安全のため」と言われて送り出された人々は、到着したその場所で安全とは程遠い過酷な現実と直面させられました。食べ物も医療も足りず、蚊に刺されて高熱を出し、苦しみながら亡くなっていく人々が次々と出ました。その数は、分かっているだけで三千人余り、八重山では、戦争の銃弾で亡くなった人よりもはるかに多い数でした。その中には私の祖父の親戚も含まれています。彼らが生きていたら、今も私たちの家族の中にいたかもしれない。そう自分に続くつながりを考えると、簡単に「過去の出来事」として片付けることの出来ない、世代を越えて及ぼす戦争の影を身近に感じました。

ふるさとの私の家の近くには、戦時中のマラリアで亡くなった人

を祀る慰霊碑があります。そこには今でも静かに手を合わせるおじいやおばあ姿があります。ある日、ふと立ち寄ったその場所出会った年配の女性が私に話しかけてきました。「ここにある名前はね、私の祖母の名前。私の母が私を身ごもった当時、祖母はマラリアに感染していたね。身重だった母は近づくことも許されずに、ただただ苦しむ親の姿を見ていることしかできなくて。その手に孫を抱かせてやることも叶わずにマラリアは祖母の命を奪っていったのよ。」石に刻まれた名前を優しくなぞりながら彼女は語り伝えてくれました。この島では、戦争に関係しない人なんていない、石に刻まれた名前ひとつひとつが誰かの家族であり、誰かの友人であり、誰かの大切な人でした。確かに生を紡いでいた命だったのです。

戦争マラリアは、「見えない敵」によって命を奪われた悲劇です。戦争の犠牲は、銃を持ち、殺し合う兵士だけではなく、女性や子ども、お年寄り、何の罪もなく非力な市井の人々が、ひとたび始まれば、あつという間に戦禍に巻き込まれ亡くなっていく、それが戦争なのです。国と国が始めた戦争で亡くなるその多くはいつの時代も、日々の暮らしを営み紡ぎゆく、「私」や「あなた」にすぎない一般市民なのです。戦争は暮らしも文化も、人の命も根こそぎ奪ってしまします。そして、今では「見えないまま忘れられようとしていく歴史」でもあります。

世界では今も、ウクライナのように争いに苦しむ人々があります。戦争は決して過去の出来事ではなく、今も続いている現実です。そして多くの人々が命を落とし亡くなっている事実です。八重山の戦争マラリアは戦争が及ぼす多くの悲劇、今につながる痛みを私に訴え続けた「もうひとつの戦争」でした。

現在の西表島は、世界自然遺産に登録され、豊かな自然と多くの命が息づく島となりました。その美しさを支えているのは、目に見える景色だけではなくありません。この歴史を知った一人の人間として、二度とこの悲しみを繰り返さないためにも、平和について考え、その思いを次の世代へ伝えていきたいです。

最優秀賞

最期の場所に灯る火

島根県

堀^{ほり}西^{にし}祐^{ゆう}多^た

その家の居間には、薪ストーブがあり火が静かに揺れていた。病院の白い天井や機械音ではなく、そこには暮らしの時間が流れていた。床のきしむ音、家族の気配、薪の音。その火のそばに、その人は座っていた。がんはすでに進んでいたが、そこにいたのは「患者」ではなく、この家で生きてきた一人の人だった。訪問診療で、その方の家を訪ねた。食えることは難しく、だるさや息苦しさもあった。医学的には、できることが限られていた。それでも、その人は死を恐れているように見えなかった。「自分の人生にしては出来すぎだった」。そう語る表情には、晴れやかな強さがあった。長く生きることも、最期をいかに自分らしく生ききるか。その心は、そこに向かっていた。薪ストーブは、単なる暖房器具ではなかった。薪割りを通じて、若い世代や孫たちとつながる場もあった。大切にしてきたものを、次の世代に手渡したい。言葉だけでなく、手を動かす姿や火を囲む時間の中で伝えたい。その人は、限られた時間の中でも、最後まで何かを手渡そうとしていた。その方は、地域の教育者だった。遠慮のない言葉に戸惑うこともあった。けれど奥様は、その奥にある思いや不器用さを知っていた。二人の間には、外からは測れない信頼があった。医師としてその家を訪ねていたはずだったが、いつの間にか、その人の前で学ぶ者になっていた。病気が進

むにつれ、食えることは難しくなり、痛みも強くなった。それでも、その人も奥様も、私たちも、少しでも楽に過ごせる方法を共に悩んだ。痛み止めをどう使うか。どんな姿勢なら飲み込みやすいか。どのような形なら口にできるのか。ある日、奥様が作った味噌汁を、その方がうれしそうに口にした。その一口は、単なる水分や塩分ではなかった。長年連れ添った人が作る味、家で過ごしてきた時間の記憶、「まだ自分はここにいる」という証でもあった。病気が多くを奪っていく中で、その一口が守っていたものは、その人の尊厳だった。治すことが難しくなった時、医療は無力になるのだろうか。その問いが浮かぶたび、薪ストーブの火を思い出す。火は病を消せない。命の終わりの止められない。それでも、その部屋をあたため、人を静かにつないでいた。痛みを和らげ、不安に耳を傾け、奥様が一人で抱え込まないように支えること。その人が大切にしてきた場所で、最期までその人として過ごせるようにすること。そこにも、確かに医療があった。最期は夜中だった。奥様、ご家族、訪問看護師、私たち医療者がそばにいた。最期の診察とエンゼルケアの時間には、不思議な静けさがあった。悲しみは確かにあった。それでも部屋には、「ここまで一緒に歩いてきた」という安堵も満ちていた。家を出ようとした時、訪問看護師が奥様を抱きしめた。その瞬間、それまで張りつめていたものが切れたように、皆が泣いた。役割の境界がほどこ、そこには一人の人を大切に思い、その人を失った悲しみを分かち合う、人と人がいた。看取りとは、死の瞬間だけを支えるものではない。その人がいなくなった世界を、遺された人が再び生きていく。その最初の一步を、共に支えることでもあるのだと知った。命の終わりは、関係性の終わりではない。その人が座っていた場所、口にした味噌汁、

残した言葉、薪を割る手つき、孫たちに向けたまなざし。それらは、亡くなった後も家族の中に残り、私たちの中にも残っていく。遺された人は、その面影を抱きながら、故人の物語を自分たちの人生の中で紡ぎ直していく。医療の仕組みは欠かせない。ただ、病名や処方だけでは、その人が何を愛し、誰に何を残したかったのかは分からない。薪ストーブのそばで過ごしたい願ひも、奥様の味噌汁をもう一口飲みたい思いも、制度には収まりきらない。だから私たちは、暮らしの中にそっと耳を澄ませる。

あの夜の静けさの中で、平和という言葉は私の中で少し形を変えた。それは薪ストーブの火のように小さく、けれど確かなものだった。弱っていく人の心を置き去りにしないこと。支える家族の涙を受け止めること。その人が生きた意味を遺された人の明日へ、そつと手渡していくこと。薪ストーブの火は、やがて小さくなる。しかし、その火を囲んだ時間は消えない。薪を割る記憶、奥様の味噌汁、最期の別れ、抱きしめられた背中。その一つ一つが、遺された人の中で灯り続ける。支えていたのは、命の長さだけではなかった。その人が生きた意味を、遺された人の中に灯し続ける時間だった。

最期まで教える人だったその方から、今も学び続けている。制度だけでは届かない声に耳を澄ませること。苦しむ人のそばに灯る小さな火を見失わないこと。その火が、明日をあたためるように。私はこれからも、その火のそばに立ち続けたい。

優秀賞

世界一小さな平和運動

東京都

中^{なか}村^{むら}邦^{くに}夫^お

「今、世界に必要なのはキンツギです」

2023年、東欧ブルガリアのソフィア大学で金継ぎのワークショップを開いたとき、ある女子学生が目や輝かせながら、丁寧な日本語でそう言った。

ロシアによるウクライナ侵攻から一年が過ぎていたが、大学にはロシアやウクライナからの留学生も多く、それぞれの胸のうちに複雑な痛みを抱えたまま日々を送っていた。

平和な日常が暴力によって突然引き裂かれ、故郷を追われた人々が、ここで学んでいた。彼女の言葉は、私の活動の根っこを、深く静かに揺さぶった。

それ以来、私は紛争の傷跡が残る土地で「修復」という行為を通じて、言葉や国境を越えた対話を探し続けている。

日本固有の美学である「金継ぎ」と、小さな積み重ねで前へ進む「改善」の思想を重ね合わせ、私はそれを「世界一小さな平和運動」と呼んでいる。

金継ぎとは、陶磁器の割れや欠けを漆で接着し、継ぎ目に金粉を蒔いて仕上げる修復の技法だ。その核心にあるのは、傷を「なかったこと」にしないという逆説だ。

西洋の修復が「元の姿に戻すこと」を目指すのに対し、金継ぎは

むしろ傷の記憶を金色に光らせることで、器に「第二の生」を与える。不完全さの中に美を見出し、時間の経過を慈しむ——日本の「侘び」の精神に根ざした、静かな倫理観だ。

私自身、能登半島地震で輪島のアトリエを失い、瓦礫の中から自分の手で破片を拾い集めた経験がある。そして、更地になった土地で漆の栽培を始めた。このような経験を通じて初めて、修復とは単なる技術ではなく、失われた時間や記憶をもう一度手繰り寄せようとする、生きている者の営みだと身をもって知ったような気がする。

ブルガリアで出会ったウクライナからの留学生は、慣れない手つきで修復途中の茶碗をそつとなぞり、こう言った。

「私たちの壊れた町も、いつかこのように元に戻したいです」

これには、軽々しい言葉で答えることができなかった。ただ黙って彼女の隣に座り、一緒に器を継いだ。割れ目に漆を塗り、金粉を慎重に蒔く。静寂の中で金が輝き始めたとき、彼女の瞳にかすかな光が宿った。言葉は要らなかった。傷ついたものと並んで向き合い、それをそつと手当する時間は、確かに何かを生んでいた。

教えることが教わることになり、その手はやがて別の地へ金継ぎの哲学を伝えていく。修復という行為は、それ自体が静かな連鎖を起す。条約でも制度でもなく、個人の手仕事を通じた、心と心の直接的な対話として。

もうひとつ、私が大切にしている考え方が「もののあわれ」だ。桜の花が散るのを見て、なぜ胸が痛むのか。別に、悪いことが起きたわけではない。花は本来散るものだし、来年もまた咲く。それでも人は、その光景の前で立ち止まり、言葉にならないものを感じる。これがもののあわれというものの核心だと思う。

本居宣長が「もののあわれ」を日本の美的理念として打ち立てたのは、十八世紀のことだ。彼は『源氏物語』を生涯かけて読み解き、その本質を一語に集約した。

「もののあわれを知ること」——これが物語の、そして文学の意味だと宣長は言った。善悪の判断ではなく、感じることの深さ。理屈ではなく、心が動かされることそのもの。

宣長の言葉で私が最も鋭いと思うのは、「あわれ」が喜びにも悲しみにも使われるという観察だ。嬉しいときも、悲しいときも、美しいものに触れたときも——人の心が深く揺さぶられるとき、そこに「あわれ」がある。単なる悲哀ではなく、感情の深度の話だ。

世界は今、深い傷を抱えている。でも、傷から目を背けなくていい。金粉を用意して、待っていればいい。修復はいつも、そんな小さな準備から始まる。

ブルガリアから届く写真の中で、今日も学生たちの手が光っている。彼らが継いだ器は、国境を越えて人々のもとへ届いていく。傷と金が変わるその細い線の上に、世界一小さな平和が宿っている。

平和とは、達成すべき完成した状態ではなく、傷を抱えたまま、共に継ぎ続けていく行為そのものだ。戦争は一瞬で壊す。でも平和は、一つの継ぎ目から、静かに始まる。

佳作

その人の名を呼ぶところから

東京都

本^{ほん}多^だ清^{きよ}之^{ゆき}

平和という言葉を口にするとき、私はいつも少し身構えてしまう。大きすぎる言葉だからである。国家、戦争、核兵器、歴史。どれも大切なことだが、その大きさの前で、ひとりの人間が何をすればいいのか、かえって見えなくなることがある。

永井隆博士の生涯をたどって、私がつとも強く受け取ったのは、平和とは大きな理念である前に、目の前のひとりを人間として扱うことなのだ、ということであった。

博士は放射線医学の研究により白血病を患い、さらに長崎の原爆で重傷を負った。それでも、傷ついた身体で被災者の救護にあたった。自分も倒れそうな人間が、倒れている人のそばへ行く。その姿を思うと、「愛」はやさしい感情のことだけではないのだと感ずる。愛とは、余裕のある者が余った力を分けることではない。自分にも痛みがあるのに、その痛みを理由に相手を見捨てないことなのだと思う。

博士が晩年を過ごした小さな家は、「己の如く隣人を愛せよ」という言葉から如己堂と名付けられた。二畳ほどの部屋から、博士は『長崎の鐘』や『この子を残して』を書いた。寝たきりの人が世界へ向けて平和を訴えたという事実は、平和の出発点が、必ずしも強い場所や高い場所にあるわけではないことを教えてくれる。むしろ、動けない場所、失った場所、弱さを抱えた場所からでも、言葉は外へ

届く。

私たちはふだん、争いを遠いものとして考えがちである。戦争は政治家や軍隊が起こすもの、平和は国際会議で決められるもの。もちろん、それは間違いではない。けれど、争いの芽はもっと小さいところにもある。意見の合わない相手を「わからず屋」と呼ぶ。迷惑をかけた人を「非常識な人」と片づける。失敗した人を、事情も聞かずに責める。そうした小さな切り捨てが重なった先に、人と人との互いを人間として見なくなる瞬間がある。

だから私は、愛と平和の最初の行為は、

「その人の名を呼び直すこと」だと思っている。

敵、被害者、加害者、外国人、老人、若者、正しい人、間違った人。私たちはすぐに人を分類する。分類すれば考えるのは楽になる。だが、その人には本来、名前があり、帰る家があり、誰かに心配される夜がある。永井博士が「己の如く」と言ったとき、それは相手を自分と同じに考えるというより、自分にある痛みや願いが、相手にもあると想像する力のことではないか。

平和を願うと言うだけなら、誰にでもできる。むしろかしいのは、自分の正しさが傷つけられたときに、相手を完全な悪者にしないことである。相手を許せない日もある。腹が立つ日もある。人間だから当然である。それでも、相手にも名前がある。事情がある、帰りを待つ人がいる、と一拍置く。その一拍が、暴力へ向かう足を止めるのだと思う。

私は年齢を重ねるにつれ、平和は完成品ではなく、毎日つくり直すものだと感じるようになった。家庭でも、職場でも、地域でも、平和は黙っていれば保たれるものではない。少し損をしても話を聞

く。早合点しない。強い言葉を飲み込む。困っている人に、何か手伝えることはないかと声をかける。どれも世界史の教科書には載らない。けれど、そうした小さな振る舞いが、人を孤立から引き戻す。

永井博士の「平和を」という願いは、遠くの世界へ向けられた祈りであると同時に、すぐ隣の人をどう見るかという問いでもある。愛とは、自分と似ている人を大切にすることだけではない。自分と違う人、自分を困らせる人、自分には理解しきれない人を、それでも人間として見つづける努力である。

平和は、戦争がない状態だけを指すのではない。人が人を、名前のある存在として扱える状態のことだと思う。

私は大きな平和を、一度に作ることはできない。けれど今日、目の前の一人を雑に扱わないことならできる。知らない誰かをひとまとめに憎まないことならできる。怒りの言葉を、少しでも遅らせることならできる。

如己堂の小さな部屋から発せられた願いは、今も私たちに届いている。平和は遠い理想ではない。隣にいる人の名を、もう一度、人間の名と呼ぶところから始まる。

佳作

心の灯り

三重県

原^{はら}若^{わか}菜^な

「誰も……取ったりしないのにね」

児童養護施設で働く夫が、仕事から帰ってきてぼつりと言った。

「どういう意味？」

私は、そつと聞き返した。夫は少し視線を落として続けた。

「施設の子がね、ご飯を出すと一気に口に詰め込むの。食べるというより、飲み込む感じかな。誰かに取られるとか、今食べないと次がないとか、そんな環境にいたんだと思う。施設では誰も取ったりしないのになって思ってたね」

心がギュッと締め付けられた。その日、「空腹」の意味が、私の中で変わった。

お腹が空くと、人はイライラしてしまう。でも、それは「次の食事がある」と信じられる人の空腹なのだ。本当に食べることに不安を抱えている人の空腹は、もつと深い。

夫は、ご飯をゆっくり味わってほしいという思いで調理師になった。でも、子どもたちは、食事を楽しむという当たり前さえ奪われていた。

「少しずつ、施設ではゆっくり食べても大丈夫。安心して食べてもいいって気づいてくれるんじゃないかな」

と私が言うと、夫は目を細め遠くを見つめながら答えた。

「そうなるといいよね。でも、今の状態は危ないから、窒息しないよう食事を細かくしてるんだ。いつかちゃんと美味しいって味を楽しめる食事ができるといいなって思ってる」

夫の言葉は、私の胸にも静かに落ちてきた。

私は小学校で教員をしている。学校でも経済的な格差や愛情の注がれ方の違いを感じる場面は多い。小さな身体で厳しい現実を背負う子どもたちがいる。

「かわいそう……」という言葉だけでは、あまりに軽く感じた。

本当は、もつと何かできる人になりたかった。

そんなことを考えながら夫と二人でカフェに入った時、懐かしい記憶が胸に灯った。

昔、祖母が喫茶店を営んでいた。少し薄暗い店内をオレンジの灯りが包み込み、「おかえり」と優しく声をかけてくれる場所だった。学校帰り、私は祖母の店で宿題をしながら両親の帰りを待った。湯気の立つコーヒートの香りと、クリームソーダの甘さが、幼い私の心をそつとほどこしてくれた。

あの時の安心感を、私は今でも忘れられない。誰かに見守られ、ここにいていいんだと思える感覚。それは、目には見えないけれど、確かに“愛”だった。

夫の話を聞いて以来、ある願いが心に浮かぶようになった。

もし、あの喫茶店のような場所が、あの子たちにもあったらどうだろうか。

「取られる前に食べなきゃ」と焦ることもなく、「次はないかもしれない」と怯えることもなく、ただ安心して、ゆっくり食事ができる場所。そんな場所があれば、心は少しずつ救われていくのではないだろうか。

いか。

私は、その子たちの痛みを本当の意味では知らない。

食べられなかった経験も、愛されなかった経験も、明日を生きられるか分からない恐怖も、私は味わっていない。

だからこそ、軽々しく「大丈夫だよ」と言うことはできなかった。

助けたいと思うほど、その言葉の軽さが怖くなった。

けれど、心がほんの少しでも楽になる瞬間があるなら、その小さな灯りをもとす人でありたいと思った。

平和や愛には形がない。

けれど、確かに失われてしまうものはある。

愛されないこと。食べられないこと。安心できないこと。

それらは、戦争ではなくても、心の平和を静かに蝕んでいく。

だから私は、いつか夫と一緒に、安心して「ただいま」と言える場所を作りたいと思っている。

美味しいご飯があつて、優しさに包まれ、祖母の喫茶店の灯りのように心を照らす場所。

そこでは「おかえり」と声をかけ、宿題を一緒に考え、できたことを喜ぶ。

誰かが待っていてくれる。それだけで、人は安心できる。そんな小さな安心が、どれほど心を支えてくれるだろう。

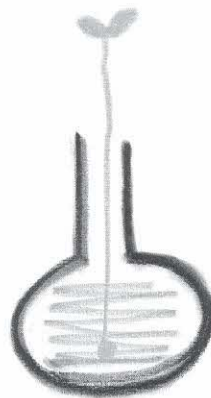
平和も愛も、目には見えない。けれど、心がふっと軽くなる瞬間は、確かにある。その瞬間こそが、平和のかけらであり、愛のかけらのだと思う。

一人ひとりの心にもった小さな灯りが、平和の灯りにつながっていくのだと思う。

私は、誰かの心にそっと灯りをもとす人でありたい。



NO



YES

KU
2007. 8. 26